



# 敬

TAKASHI

# 原

HARA



## 原なき後日本は転落 道迷わば原点に戻れ

官と戦い、軍と戦い、国際協調路線を推進。国が進むべき道を明確に掲げた原敬。明治期最後のジェネラリストに学ぶ点が多い。

齋藤 健

内閣官房企画官

往々にして忘れられがちではあるが、この時代のもう一つの特徴は、日本人自身が自己改革に呻吟した時代だったということだ。別の言い方をすれば、右は国家改造思想から左は共産主義思想まで、多くの日本人が改革を求め実行した結果が、皮肉にも悲劇の転落となった。

原敬は、頂点でもなく奈落の底でもない歴史のうねりの中間時点で、派手さのない、平時の大改革者として忽然と現れ、忽然と消えた。

### 原敬に学ぶ 4つの功績

原敬の功績については初の政党内閣を組織した平民宰相という点が強調されがちだが、実はもっとスケールが大きい。ここでは凝縮した形で四点指摘したい。

一つ目は、「官」との戦いである。

「官」といっても、当時の「官」は、山県有朋を頂点として圧倒的な力をもつ薩長藩閥であり、原敬は賊軍・南部藩出身の平民として、政党をバツクに果敢に挑戦した。

1906年、第一次西園寺内閣の内相に就任するや否や、原敬は、わずか二カ月で郡制廃止法案を議会に提出する。郡制は山県有朋が内相時代に導入したもので、絶大な権限をもつ郡長には山県系の官僚が就任していた。原は、その山県の全国支配力の源泉の一つに真っ向から切り込

んだのである。残念ながら、法案そのものは、いまだ山県の影響下にある貴族院によって否決されることになったが、のちの総理時代に晴れて議会を通過させている。

また、山本権兵衛内閣の内相時代には、文官任用令を改正し、政党員の官吏登用への道を開いた。

そして、ついに総理に就任すると、陸海外三相以外の閣僚をすべて政友会員から選任して世間をアツと驚かせる(ただし、党人は一人だけで他は官界財界出身者)。しかも原内閣では、田中義一陸相が病気のため交代したのと、貴族院対策として大木遠吉を専任法相に任じた二つのケースを除いて、三年間布陣を変えなかった。

あらゆる政策課題に精通していた原は、不案内の大臣に対しては、答弁を助け自ら助言を与えながら強力な指導力を発揮したのである。

原敬が挑戦したのは、政治の構造改革であり、薩長藩閥の既得権益を壊し、国民に選ばれた政党がリーダーシップを発揮する政治の実現であった。原敬は、このような困難な仕事に際し、度胸よく手を打つと同時に、抵抗勢力である山県有朋ら元老との徹底的な対話を積み重ねながら、粘り強く処理していったのである。

二つ目は、国際協調路線の推進である。

今、原敬という先人から学ぶべきことは多い。

原敬が、衆議院議員に初当選し歴史の檜舞台に足をかけたのは、ちょうど一〇〇年前の1902年のことだった。

二年後、日露戦争が勃発する。日露戦争での日本の勝利は、明治維新以来ゼロベースの改革を繰り返して

きた努力の成果が、一つの頂点に達した画期的な出来事であった。

逆に、日露戦争から第二次世界大戦に至る歴史は、頂点から奈落の底への転落の歴史となったが、原敬はその頂点のころから歴史の舞台で力を発揮し始め、転落に至る折り返し地点で舞台から去るという時代状況を生き抜いたことになる。



当時、1915年（大正4年）の対華二十一ヶ条要求などにより、日露戦争で威力を發揮した日英同盟も色あせてきていた。山県有朋らを中心とする元老たちは、日露提携を軸にして英米等に対抗し、国際社会の中で勢力拡大を図ろうと努力していたところであった。

ところが、1917年にロシア革命が起り、日本は、日露という外交の基軸を失う。

原のすこみは、このような混乱した国際情勢の中、対独参戦（14年）、対華二十一ヶ条要求（15年）、シベリア出兵（17年）、対華借款問題（18年）、ワシントン軍縮会議開始（21年）という世界的な出来事に次々と直面しながら、アメリカが新しい勢力として台頭することを洞察し、一貫して対米協調を追求したことである。

また、懸案の対中政策においては、それまでの帝国主義的権益拡張主義を時代遅れだとし、むしろ、中国に対して中立の立場をとりながら、中国を市場と見て産業競争力で列強との競争に立ち向かうべく手を打った。

振り返ると、この原敬の対アメリカ観、対中国観は、その的確さに感嘆を禁じえないが、われわれの課題は、原敬が、いかにしてこのような洞察眼を養うに至ったかということである。

筆者は、何事も自分の目で見ること

とを重視した原敬の貪欲な現場主義にその秘密が隠されているのではないかと思考する。

原敬は、とにかく日本を、そして世界を見たかった。新聞記者時代、まだ漠然としている自分の志を遂げるためには、まず日本中を訪ね歩くことだと考え、あらゆる機会を利用して各地を見て回り、しかも、詳細

の潜在力を実感し、20世紀がアメリカの世紀であることを確信したことである。

原敬の炯眼は、若いころから自ら追い求めた現場感覚に由来しているように思えてならない。

三つ目は、混乱の時代にあつて、原点に立った国のビジョンを掲げた点である。

政策資源を集中的に投入したのである。

同時に、日本が誇れる唯一の資源は人材だと喝破し、まず、私立大学の設立を認めた（それまで専門学校として扱われてきた慶応義塾、早稲田もこのとき大学となる）。併せて、産業の国際競争に勝ち抜くための経済人を養成すべく、高等教育機関の大幅な増設を推進したのである。

「道に迷えば原点に戻れ」

方向感が動揺する時代にあつて、首相自身が進むべきビジョンを示しながら改革に邁進した姿が浮かび上がってくる。

四つ目は、「軍」との戦いである。原敬は、のちに猛威を振るうことになる「統帥権の独立」を盾にとる軍部を何とか政府の支配下に置こうと、腹を据えた具体的努力を重ねる。

山本権兵衛内閣のときは、内相として総理と呼吸を合わせながら、陸海軍の大臣および次官の任命資格を現役から予備役にまで拡大した。また、総理に就任してからは、台湾総督をそれまでの軍人から文官に切り替え、ワシントン軍縮会議に参加する加藤友三郎海相の代理に自ら就任した。これは、陸・海相に事実上文官が就任した最初で最後のケースとなった。

また、シベリア撤兵に際しても、参謀本部と決定的に対立しながら撤兵の姿勢を貫いた。



毎日新聞社提供  
明治・大正期の政治家。盛岡出身。明治12年（1879年）政治記者となったが、官界入りし、天津領事、パリ公使館書記官となる。後、外務次官。明治30年官界を退き大阪毎日新聞社社長。明治33年立憲政友会の創立に参加し幹事長。明治35年衆議院議員。大正2年政友会の第3代総裁。大正7年寺内内閣に代わって組閣、わが国最初の本格的政党内閣を実現。大正10年、大塚駅員中岡良一（こんいち）によって東京駅頭で刺殺。

はら たかし

(1856~1921)

# 原敬

な記録を残している。

官の世界に入ってから、天津、パリ、朝鮮半島と赴任し、さらに野に下っていた第二次西園寺内閣時代（1908）、自ら希望して半年間、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ロシアなど、実に十六カ国を表現している。中でも原敬にとってもっとも収穫だったのは、アメリカ

原敬は、総理就任後、四大政策を

発表する。教育制度の改善、交通施設の整備、産業の振興と通商貿易の開導、軍備の充実がそれである。

第一次世界大戦後の経済不況の中、資源・食糧・エネルギーに乏しい日本の経済・産業政策の原点は、産業の国際競争力であり、日本に有利な通商環境の整備であるとして、



一方で、原の炯眼は、素人である軍事の分野でも発揮される。原は真珠湾攻撃の二〇年以上前に航空機の将来性に着目し、航空隊拡張の必要性を説き、いずれ航空軍という独立の一軍が出現すると予言しているのである。

原敬の不思議なところは、「軍」と対立しながらも「軍」の代表でもある山県有朋には、原について、「人格と云ひやり口と云ひ、実に立派なものである」という発言を残させている点である。また、日露戦争直後に強硬派で鳴らした田中義一も、原に尊敬の念を感じ、原内閣の下では陸相として「軍」を押さえる方向で力を注ぐようになっていった。

その後の、特に、1930年代に入ってから軍靴の歴史を振り返るとき、わずか一〇年前に、原敬のような洞察力と実行力をもって「軍」と対峙した人間がいたということには、大変勇気づけられる思いである。ただ、残念なのは、それは、あくまでも原敬という巨人にして初めて可能だったということである。

## トップエリート の徹底した努力

原敬が活躍した日露戦争後の歴史は、武士の末裔であるジエネラリストの明治の元勳たちが歴史の舞台から次第に消え去り、代わりに、近代軍事教育を受けたスペシャリストの

軍事官僚が主役として躍り出る、世代交代の歴史となった。政党は、原敬の力により元勳に代わるものとして一瞬の光芒を放ったが、原の死によって悲しい衰退をたどる。

一一歳で明治維新を迎えた原敬は、最後のジエネラリストの系譜に属する。一九歳のときの原の読書歴を見ると、『十八史略』、『元明史略』、『史記』、『前後漢書』、『晋書』、『唐書』、『資治通鑑』……と延々と並ぶ。スケールの大きな中国の治乱興亡の歴史を頭に思い描きながら、指導者とはどうあらねばならないかを静かに追求している姿が目につかぶ。しかもそのときすでに、キリスト教の洗礼も受けているのである。

その後の原敬の人生を簡単に振り返ってみる。二一歳のとき、前島密が後援して創立された郵便報知新聞の記者となる。のちに、大東日報社に移り、外務次官を務めたあととは、一時期、大阪毎日新聞社の社長も引き受けている。この間、社長自らの努力により、売り上げを三倍に増やしているが、何に対しても気を抜かない原の性格がよく表れている。

官の世界にも、二六歳のときに、まず外務省に入っている。フランス語の語学力が認められて天津領事となり、当時中国第一の政治家だった李鴻章とも直接談判をしている（原敬一九歳）。パリ公使館にも三年勤務し、このとき、のちに最大のライバ

ルになる山県有朋の通訳もしている。農商務省にも勤務経験があり、結局、官の世界にはトータル一五年弱在職したことになる。

加えて財界経験もある。北浜銀行の頭取だっただけでなく、古河鋳業の副社長として、事実上社長の業務もこなしたのである。

このように原は、政、財、官、メディアすべてを経験した指導者であった。さらに言えば、途中で退学させられたとはいえ、原が最初に志した道は司法省法学校（のちの東大法学部。二位の成績で入学）であり、つまり、法曹の道だった。

原敬は、政党リーダーとして、転落の淵にある日本の自己改革を成し遂げるべく、広い視野と的確な判断力、粘り強い交渉力で果敢にこの難題に挑戦したが、東京駅での凶刃の一刻しがこの流れを止めることとなった。原なき後の政党は、汚職と政策立案能力のなさを露呈しながら衰亡の道をたどり、結局、日本の自己改革は失敗に帰する。

歴史は必然によって動くものであり、一人の人間ができることは限られているという見解がある。が、原敬の足跡をたどるにつけ、一人の広い視野を持つトップエリートへの徹底した努力が、歴史の中でいかに大きな役割を果たす可能性があるかを感じずにはいられない。

原敬が凶刃に倒れた後、遺書が残

った。それは、まず、位階勲等を固く辞退するという文言で始まっている。結局、原は、生涯爵位を受けることを拒否し、腐敗が常態化していた当時の政治の中核にあっても不正の金を手にしたことはなかった。遺書はまた、自分の葬儀について、盛岡で夕方に行うこと、儀仗兵、香華の寄贈を辞退すること、そして、死亡の新聞広告の文案まで指示してあった。原は、最後まで平民として生きた。

盛岡の大慈寺にある明治の怪物ジエネラリストの墓には、遺言に従って、ただ「原敬墓」とだけ刻まれている。この墓標がわれわれに訴えるのは、「偉大な平民」の死は、「偉大な日本」の死でもあったということではないだろうか。